

優秀賞／銀の星賞

東京都 白百合学園高等学校 二年 市川 愛

『かっぱのかあちゃん』

風呂蓋ふたを開けた僕は驚いた。湯船の中にはすでに先客がいたのだ。それは緑色をしていた。そして頭の上には白い皿がのっかっていた。それは大きくてうるんだ目をもっていた。

かっぱ
河童だった。

僕はその大きな目に今にも吸い込まれそうだった。河童を見たことなど一度も無かったが、それは河童と呼ぶにふさわしいものだった。そしてそれはこう言った。

「スイカ食べたいさあ。」

これが僕とかあちゃんの出会いです。夏休み、受験塾から帰って風呂に入ろうとした僕の前にかあちゃんは突然現れ、そして一週間後突然姿を消しました。これは僕とかあちゃんの共同生活の記録です。

月曜日・かあちゃんの出現

突然現れた河童はすいかを欲しがった。僕は冷蔵庫からすいかを取り出し、切ってやった。河童は風呂場から体をふいて上がり、クーラーのかかったリビングの机にきちんと座って黙々と食べている。河童の幻を見るなんて、僕は暑さで頭がおかしくなったのかな、と考えていると、河童は僕を見透かすかのように言った。

「あの、おいらまぼろしじゃないのさあ。どうしてもすいかが食べたくて河童界からやってきたのさあ。」

河童の話によると、河童界では毎日毎食きゅうりを食べるという。彼は

それに飽きてしまったので、すいかを食べに来たそうだ。

なかなか面白い河童だな、と思った。僕の両親は小学生の僕を置いてけぼりにして先週からヨーロッパに旅行に行ってしまった。僕は中学受験のために毎日塾だからだ。そろそろ一人で家に居るのがさびしくなってきたので、心のどこかでこの河童の訪問を喜んでいた。

“河童”と話しかけるのもなんなので、僕は彼を“かあちゃん”と命名してみた。彼も案外気に入ったようなので、“かあちゃん”と呼ぶことにした。するとかあちゃんは僕を何と呼べいいのか尋ねてきた。僕が太郎という名前だと伝えると、かあちゃんはこう言った。

「じゃあタロちゃんだべさあ。」

その日は遅くまでかあちゃんの身の上話を聞いた。最近河童界ではプラスチックの皿を頭にのせるのがトレンドだということ。きゅうりは色々と品種改良され、様々な形があること、(最新のきゅうりは星形をしているそうだ)……。そんなことを聞いている間に僕はいつの間にか眠っていた。

火曜日・かあちゃんの朝御飯

目を覚ますとかあちゃんはもう隣に寝てはいなかった。僕は昨日の夜、塾の宿題をやっていたいなかったことを思い出し、朝食も取らずに学習机に向かった。少しすると廊下からかあちゃんの声がする。

「タロちゃん、朝御飯持ってきたさあ。ドア開けてえ。」

僕は立ち上がり徐におもむろドアを開けた。かあちゃんは頭の皿の上に味噌を添えたきゅうりをのせて立っていた。僕は思わず笑ってしまった。河童の頭の皿は食べ物をのせるためにあるのか、と納得してしまった。二人できゅうりを食べて、僕は机に戻った。しかしリビングの方へ歩いて行ったかあちゃんが気になったので、そつとのぞいてみると、かあちゃんは流しで頭というか皿を洗っていた。きちんとスポンジに洗剤をつけてごしごしやっ

ていた。その姿はほほえましいものだった。

水曜日・かあちゃんの大そうじ

僕が塾から帰ってくるとかあちゃんはバケツと雑巾を持って立っていた。何をやっているのか尋ねると、かあちゃんは答えた。

「タロちゃん、河童界ではね、水曜日は水の神様の日なのさあ。オイラ達は水がないと生きられないからね。だから今日は水まわりをピカピカにしなくちやなのさあ。だからタロちゃんも一緒におそうじなのさあ。」

おそうじなのさあ、と言われても僕には塾の宿題があるし、掃除ならいっもお母さんがしてくれているのに……、と思っていると、かあちゃんは僕に三角巾と雑巾を渡し、自分も皿の上から三角巾をつけた。

「ほら大事な皿にはこりがついたら大変さあ。」

とかあちゃんは言った。そして

「おいらは風呂やるさあ。タロちゃんは便所やってきてさあ。」

と言うなり、洗剤をタイルにまいてゴシゴシ洗い始めた。僕も仕方なくトイレ掃除をしに行った。

かあちゃんから渡された雑巾で便座をこすりながら僕はふと思った。何で河童であるかあちゃんと言葉が通じるのであろう……。考えれば考える程不思議に思えてきたので、あとでかあちゃんに聞いてみようと思った。

トイレ掃除を終えた僕は風呂場のかあちゃんの様子を見に向かった。風呂場の扉は閉まっていた。かあちゃん、と声をかけるが返事はない。嫌な予感がした僕が急いで扉を開けると、中は塩素の臭いが充満していた。かあちゃんは湯船の中で雑巾を握ったまま倒れていた。僕は急いでかあちゃんを抱き上げ、リビングのソファに寝かせた。かあちゃん、かあちゃんと何度も呼びかけたが返事はない。ああ洗剤を使う時はよく換気をするように言っておけばよかった……。僕は後悔し、このままかあちゃんが目を

覚まसानかったらどうしよう、と悲しくなった。救急車を呼ぼうと考えたが、河童を診察してくれる病院などどこにあるだろうと思った。それならもしかして獣医さんと呼ばれば良いのか！ 色々考えたものの何もできないでいると、ソファからうめき声が出た。

「ううう、タロちゃん水くれえ……。」

かあちゃんは生きていた！ 僕は急いでコップに水をくみ、かあちゃんに渡した。ほっとした。かあちゃんは生きていたのだ。かあちゃんは水を半分飲み、残りの半分は頭の皿にかけて言った。

「おそうじしてたら、だんだん空気がツンとしてきたのさあ。タロちゃんのいる所にまでツンとした空気がいくとタロちゃん嫌だろうと思ったさあ。そんでドア閉めたら、知らんうちに酔ってしまったさあ。でも水飲んだら酔いは醒めたさあ。」

僕がかあちゃんはやさしい河童だね、と言って、次に掃除をする時はきちんと窓と扉を開けてやるように教えた。かあちゃんは大きな目で僕を見つめてうなずいた。

木曜日・かあちゃんの河童語講座

「タロちゃんお帰り。すいか切っておいたから一緒に食べようさあ。」

かあちゃんは僕が帰って来ると玄関で出迎えてくれた。スイカを食べながら僕は昨日便座を磨きながら不思議に思ったことを尋ねてみた。するとかあちゃんは答えた。

「おいらの学校では河童語の他に人間語の授業もあるのさあ。卒業してから人間の世界に留学する人もいるからね。だからおいらは人間語も話せるのさあ。」

かあちゃんが学生だったことに驚きながら僕はスイカを食べる。かあちゃんは続ける。

「そうだ、タロちゃんに河童語を教えてあげようさあ。」

僕がうなずくとかあちゃんはスイカを食べる手を止めて話し始めた。

「まずね、こんにちははッカパニチワ」さあ。タロちゃんも言ってみてさあ。」
カパニチワ、と僕が言うとかあちゃんは目をぱちくりさせて

「タロちゃん上手さあ。じゃあ次はいただきますさあ。ッカパダキマス」。

僕が繰り返すと、かあちゃんは嬉しそうに次々と言葉を教えてくれた。
ごちそうさま、はッカパソウサマ、さようなら、はッサヨウカパ……。
こうしてみると案外日本語と河童語は似ていた。人間と河童は似ているの
かもしれないな、と僕は思った。かあちゃんはすいかをたらふく食べて、
満足したようだった。そして言った。

「ねえタロちゃん、おいら今度かっぱ巻食べたいさあ。人間語の教科書に載
ってて、ずっと食べたいなあと思ってたさあ。」

僕が、今度ね、と言って笑うと、かあちゃんも大きな目を細めて満面の
笑みを浮かべた。

金曜日・かあちゃんの皿が割れた

朝からかあちゃんの様子がおかしい。緑色の体は赤みを帯び、とてもだ
るそうさ。昨日の夜、おなかを出してクーラーをつけたまま寝てしまい、
風邪をひいてしまったらしい。

「ハクシヨエー」

すごいくしゃみもしている。僕は塾に行かなくてはならなかったので、
かあちゃんにきちんと寝ているように言って、心配しつつ家を出た。

午後、帰宅すると、かあちゃんは今にも泣きそうな顔をしてソファに座
っていた。

「タロちゃん、頭痛いさあ。皿にひび入っちゃったさあ。」

見ると皿には大小無数のひびが入り、今にも割れそうだった。くしゃみ

の衝撃でできてしまったらしい。かあちゃんの頭上があまりにも痛々しいので、僕は食器棚を開けて代わりになりそうな白い皿を探し始めた。棚の奥の方に良さそうな皿を見つけたのでかあちゃんに声をかける。すると突然

「ハアックシヨエーン。」

というすごいくしゃみと共に

「ガッチャーン」

と皿が割れた音がした。僕が驚いて振り返ろうとすると、かあちゃんは叫ぶ。

「見ないでさあ〜。頭は誰にも見られちゃいけないのさあ〜。」

僕がどうしたらいいか分からないでいると、かあちゃんは再び叫んだ。

「タロちゃん早く新しい皿を投げてさあー。」

僕はとっさにさっきの皿を投げた。恐る恐る振り返ると、かあちゃんは光の中に立っていた。光は皿とかあちゃんの連結部分から放たれていた。光は次第に強くなり部屋全体が眩しい程に明るくなった。僕は目を開けていることができなくなり、その場にうずくまってしばらく動けなかった。

「タロちゃん、大丈夫さあ?」

僕のかあちゃんの声で目を開けた。かあちゃんはすっきりとした表情で立っていた。

「タロちゃんのくれた皿、ぴったりさあ。ありがとうさあ。」

僕のかあちゃんを上から下まで見渡した。確かに僕がさっき投げた皿がかあちゃんの頭にはのっていた。

「こんなにいい皿もらえてうれしいさあ。向こうに帰ったら友達に自慢するさあ。」

僕は驚いたり疲れたりしたが、とりあえずかあちゃんが元気そうで良かったと思った。

土曜日・かあちゃんかつぱ巻を食べる

土曜日は塾が午前中だけなので、僕とかあちゃんは昼御飯に寿司を食べに行くことにした。かあちゃん希望のかつぱ巻を食べるのが目的である。さすがにかあちゃんを連れて外を普通に歩くのはまずいと思ったので、かあちゃんには塾に行く時に使っている鞆に入ってもらうことにした。かあちゃんは大ききの割に案外重かった。

「甲羅がある分重いのさあ。別に肥満河童ではないさあ。」
と、かあちゃんは弁明した。

僕は鞆を持って近くの回転寿司に向かった。歩きながら財布の中身を確認した。小銭ばかりだが数えてみると千二百五十円。かつぱ巻だけなら満足に食べられる、と僕は安心した。かあちゃんは時折鞆から顔を出してあたりをきよろきよろと見回していたが、かあちゃんに気づいて指を指したりする人は幸いにしていなかったようだ。

店に着くと、カップルが数組と親子連れが席に座って食事を楽しんでいた。お盆だからだろうか、広い店内にもかかわらず客はまばらだった。

僕は目立たないように店の一番奥の席へと進んでいった。家族連れの前を通る時、小さな女の子が僕の鞆に興味深そうに見ていたので、僕はさらに足を速めた。

席に着くなり、かあちゃんは頭を出し、
「タロちゃん、かつぱ巻早く食べたいさあ。」

と言う。僕は店員が水を運んで来るのを見て、とっさにかあちゃんの頭を鞆に押しこんでしまった。

「痛いさあー。タロちゃん何するのさあ?」

店員は、どうかなさいましたか、と言いながら僕の側らに水を置く。僕があわてながら、大丈夫です、と言うと、怪訝けげんな顔をしてすたすたと去っ

ていった。僕は店員が遠くに行つたのを見届けてから、鞆の中に入っているかあちゃんに謝つた。

「おいらは大丈夫さあ。タロちゃん、騒いでごめんなさい。次からは周りをよく見てからにするさあ。」

とかあちゃんは言った。

少ししてかっぱ巻が流れて来た。三枚連続で流れて来たので、僕は三枚とも取って、かあちゃんの皿の上にかっぱ巻を置いてやった。かあちゃんは頭上に手を伸ばし、かっぱ巻をむしゃむしゃ食べた。

「タロちゃんおいしいさあ。もつと欲しいさあ。」

僕もしょうゆをつけて食べてみた。

おいしかった。かっぱ巻を食べたのは久しぶりでなつかしい味がした。かあちゃんはしまいにも自ら流れてきたかっぱ巻に手を伸ばして取って食べた。奥の席に座っていたので、僕以外に誰一人河童がかっぱ巻に手を出しているのに気付いた人はいなかった。僕達はかっぱ巻ばかり十二皿も食べた。一皿にかっぱ巻は四つずつのっていたから、かなり満腹になった。もうおなかいっぱいになったかと尋ねると、

「タロちゃん、本当におなかいっぱいさあ。おいしかったさあ。」

とかあちゃんが言うので、会計をすることにした。店員を呼ぶと、彼女は伝票を片手に皿の枚数を数え始めた。そして、そちらのお皿は、と僕の鞆を指さした。僕はハツとした。鞆からかあちゃんの頭が出ていたのだ。これは、と僕は口を開いたが、何と云えば良いのか分からなくなり、あせってしまった。すると突然、かあちゃんが鞆の中から飛び出して来た。

「これはおいらの皿なのさあ。おいら達が食べたのは全部で十二皿さあ。」

僕は青くなった。かあちゃんもそれに気付いたらしく、ぎくりとした表情で僕を見ている。僕は面倒なことになったなあ、と思い、店員の方をちらりと見た。店員は目をまんまるにしてかあちゃんを見ていた。そして、

ずいぶん良く出来た河童のロボットですね、と僕に言った。僕は意外な反応に胸をなで下ろしつつ、ええまあ、と曖昧に返事をした。

帰り道、僕とかあちゃんは店員に正体がばれなかったことを笑い合った。「おいらは本当にあせったさあ。タロちゃんが大変な目にあっちゃいそうだったさあ。」

僕は、それよりかあちゃんがどこかの研究室に連れて行かれて、解剖されてしまわないか心配だった、と言った。するとかあちゃんは少し格好をつけて言った。

「冒険に危険はつきものさあ。」

僕が笑うとかあちゃんは怒った表情で、

「なんでタロちゃん笑うさあ。」

と言った。

家に帰る途中、八百屋の前を通ると、きゅうりが一本五十円だった。かっぱ巻は一皿百円だったので、ちょうど五十円残っていた。僕は八百屋のおじさんに言っ、一番大きいのを買った。そして半分に折ってかあちゃんにもあげた。

「ありがとうさあ。タロちゃんもきゅうり好きなのさあ？」

僕が好きだよ、と言うと、かあちゃんは嬉しそうだった。そして二人でセミが鳴く中をみずみずしいきゅうりをほおばりながら帰って行った。

日曜日・かあちゃん河童界に変える

朝起きるとかあちゃんがいなかった。また朝御飯でも作ってくれているのかな、と思いい台所をのぞくがかあちゃんの姿はない。僕は心配になって家中を探した。かあちゃん、かあちゃん、と呼びながら、しかしかあちゃんは見つからない。半ば絶望していると、一カ所だけ探していない場所を思い出した。

風呂場だった。僕はボタンと扉を開けた。

そこにかあちゃんの姿はなかった。しかし置き手紙と置ききゅうりがし
てあった。

“タロちゃん、おいらと仲良くしてくれてありがとうさあ。おいらはそろ
そろ河童学校の二学期が始まるので帰るさあ。タロちゃんも塾がんばって
さあ。サヨウカパ”

かあちゃんの上手とはいえない字を見て、僕は柄にもなく泣いてしまっ
た。泣くのなんて幼稚園以来だった。でも、もつとかあちゃんと一緒にい
たかったと思うと涙が止まらなかった。そして泣きながらかあちゃんの置
ききゅうりを食べた。そのきゅうりはかあちゃんと食べたみずみずしい味
がした。

これで僕とかあちゃんの話はおしまいです。かあちゃんは河童界に帰っ
てしまいました。でも僕はかあちゃんはまた僕に会いに来てくれると思う
のです。夏になったら、すいかを食べに……。